

本資料集を推薦します

(50音順・敬称略)

■新しい知見が得られる

東京大学名誉教授 伊藤隆

私もかねてからアプローチを試みた本日記が、編者たちの努力で遂に出版されることになったのは実に嬉しいことである。かつて一部が紹介され、引用されたことはあるが、未公開であった。本書は、奈良が東宮武官長、侍従武官長として昭和天皇の側近にあった時期の克明な日記と参照しながら戦後書いた「回顧録草案」を収めている。これまで活字化された『西園寺公と政局』『木戸幸一日記』『牧野伸顕日記』等々の諸史料とつき合わせるときに、昭和初期の日本の政治・軍事・外交について、特に昭和天皇が強い不安感を抱いていた陸軍とのパイプ役であった奈良の行動及び情報を通じて新しい知見を得ることができるだろう。編者の労に感謝する。

■陸軍と宮中に関する研究を活性化させる

国際協力機構理事長、東京大学名誉教授 北岡伸一

かつて、寺内正毅、田中義一、上原勇作らの文書を読んでいたとき、時々、奈良武次の書簡に出会った。奈良は、大正5年から7年まで陸軍省軍務局長を務め、長州閥ではないものの、長州閥にも信頼されており、公正中立な軍人として、独自の重みのある位置を占めていた。それが、大正11年から昭和8年まで、長く侍従武官長を務めた所以であろう。

昭和の日本政治は、陸軍の急進的な勢力と、これを封じ込めようとする勢力のせめぎあいだったが、後者の中心が宮中であった。奈良が侍従武官長から引退したのち、急速に陸軍の勢力が拡大したことは、決して偶然ではなかった。本文書は、第一線の研究者による貴重な資料の公刊であり、とくに大正期と昭和初期における陸軍と宮中に関する研究を活性化するものとして、大いに歓迎したい。

柏書房の関連資料

芦田均日記 1905 - 1945 (全5巻)

福永文夫・下河辺元春 編

A5判 上製函入 決定価(本体48,000円+税) 総3240頁 ※分売不可

第一高等学校在学中から、東京大学を経て外務省入省、衆議院議員、ジャパン・タイムズ社長、終戦に至るまで、今まで目に触れることが難しかった戦前・戦中期の日記を翻刻収録。岩波書店版『芦田均日記』には収録されていない貴重な戦前部分が明らかに。

内田康哉関係資料集成 (全3巻)

小林道彦・高橋勝浩ほか 編

A5判 上製函入 決定価(本体39,800円+税) 総1400頁 ※分売不可

陸奥宗光に可愛がられ、外務官僚として、英國公使館二等書記官、駐清公使、駐墺・米・露大使を歴任。着実な出世を遂げた内田が、外相として対英米協調外交から焦土外交へと大転換した裏側を探る。

石原廣一郎関係文書〈上巻〉回想録 (二・二六事件から東京裁判まで)

赤澤史朗・栗屋憲太郎・立命館大学百年史編纂室 編

A5判 定価(本体11,650円+税) 528頁

大正・昭和期の実業家、国家主義者として知られる石原廣一郎が書き遺した未発表の回想録。二・二六事件への関与から終戦までの「回顧録」と、A級戦犯容疑で入獄した巣鴨拘置所で書いた「敗戦から獄窓まで」の2部構成。

石原廣一郎関係文書〈下巻〉資料集

赤澤史朗・栗屋憲太郎・立命館大学百年史編纂室 編

A5判 定価(本体17,476円+税) 552頁

昭和史の激動の中で、特異な存在ともいえる実業家石原廣一郎。著書『新日本建設』『日本再建設』をはじめ二・二六事件関係書簡、日中戦争から太平洋戦争期までの意見書、東京裁判での弁護準備書など石原の思想と行動を解明する資料を収録。

東亞連盟 復刻版 (全17巻)

東亞連盟刊行会 編 小林英夫 解説

A5判 決定価(本体240,000円+税) 総6200頁

1939(昭和14)年10月の創刊号から1945(昭和20)年の最終号まで7年間全68号を完全復刻。昭和政治思想史に特異な足跡を残した東亞連盟と戦後永久平和を掲げた石原莞爾の多面的な思想と運動を解明する基本資料。

侍従武官長奈良武次(1868~1962)は、日々の出来事を克明に綴った膨大な日記を残していた。皇太子裕仁訪欧、昭和天皇即位の御大典、張作霖爆殺事件、ロンドン軍縮会議(統帥権干犯問題)、満洲事変といった日中全面戦争にいたる時期の激動の日々が冷静に記録され、天皇、宮中、軍部などがこれらの流れにどう対応したのかが新たな視点で明らかにされる。

また第4巻に収録した「奈良武次回顧録草案」は、奈良自身がその出生から最晩年にいたるまでを記したもので、明治改元直前に生まれた日本陸軍軍人の典型として興味深い記述に溢れ、日記同様の史料価値を持つ。

[編集] (*は編集代表)

波多野澄雄 (筑波大学名誉教授) *

黒沢文貴 (東京女子大学教授) *

波多野勝 (元常磐大学教授)

櫻井良樹 (麗澤大学教授)

小林和幸 (青山学院大学教授)

[造本・体裁]

A5判上製・本文2段組・総1696頁

[決定価] ※分売不可

本体65,000円+税 (オンデマンド版)

ISBN978-4-7601-4177-7

〒113-0033 東京都文京区本郷2-15-13

Tel.03-3830-1891 Fax.03-3830-5337

URL http://www.kashiwashobo.co.jp

E-mail eigyo@kashiwashobo.co.jp

柏書房

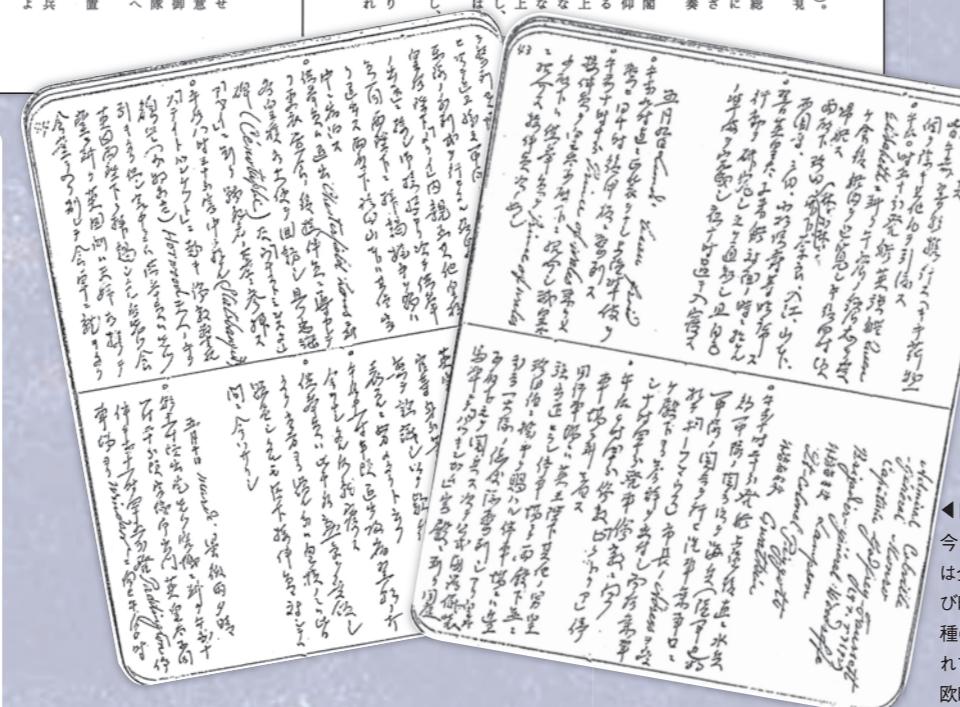
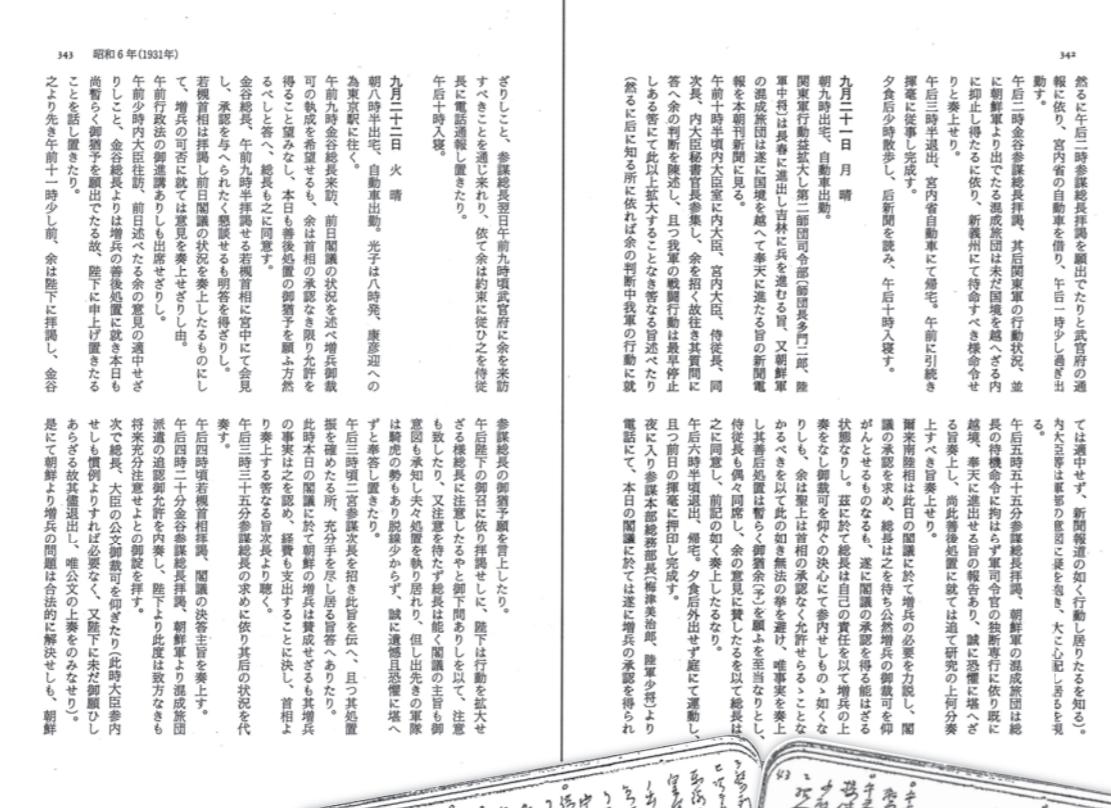
「陛下は行動を拡大せざる様総長に注意したるやと御下問ありしを以て注意も致したり、又注意をまたず総長は能く閣議の主旨も御意図も承知し……」

その時、 天皇はどう動いたか

- ◎ 皇太子時代、摂政時代をふくめ 13年間にわたり、昭和天皇を補佐した陸軍大将の日記。
- ◎ 約100冊にのぼる日記・手帳のうち、天皇側近として重きをなしていた14年分を公開。
- ◎ 生涯の活動の全貌を明らかにする奈良武次自身による「回顧録草案」を収録。
- ◎ 備忘録としての日記の特性を考慮し、周到な注を施した。とりわけ人名にたいする編者の注は、本書の利用価値を画期的に高めている。
- ◎ 天皇、宮中、軍部の具体的な動向を解明し、現代史の謎に新たな照明を与える。

全巻構成

- 第1巻 大正9年（1920）～大正12年（1923）
 第2巻 大正13年（1924）～昭和2年（1927）
 第3巻 昭和3年（1928）～昭和8年（1933）
 第4巻 奈良武次回顧録草案／陸軍出身以後ノ履歴／解説



■略歴——奈良武次

明治元年栃木県生まれ。日清・日露戦争に従軍した後、2度ドイツに駐在。大正3年から支那駐屯軍司令官、陸軍省軍務局長を経て、同7年には第一次大戦後のパリ講和会議に派遣された。このあと、同9年7月から、まだ皇太子だった昭和天皇のそばで東宮武官長。昭和天皇が摂政になった翌年の同11年11月から侍従武官長に就任。以後、昭和8年4月まで、11年間侍従武官長を務めた。その後、男爵になり、昭和12年から枢密顧問官。昭和37年12月に死去。享年94歳。



奈良武次関連年表

| 収録 | 年代 | 奈良武次に関すること | 関連する主なできごと |
|-------|---|---|---------------------------------------|
| 本書第4巻 | 慶應4年（1868）（明治元年） | 4月 栃木県上都賀郡に生れる | 10月23日 明治と改元 12月22日 太政官制を廃し、内閣制度確立 |
| 本書第1巻 | 明治18年（1885） 明治19年（1886） 明治22年（1889） 明治26年（1893） 明治27年（1894） 明治29年（1896） 明治33年（1900） 明治34年（1901） 明治35年（1902） 明治36年（1903） 明治37年（1904） 明治38年（1905） 明治39年（1906） 明治41年（1908） 明治43年（1910） 明治45年（1912）（大正元年） 大正3年（1914） 大正4年（1915） 大正5年（1916） 大正6年（1917） 大正7年（1918） 大正8年（1919） 大正9年（1920） 大正10年（1921） 大正11年（1922） 大正12年（1923） 大正13年（1924） 大正14年（1925） 大正15年（1926）（昭和元年） 昭和2年（1927） 昭和3年（1928） 昭和4年（1929） 昭和5年（1930） 昭和6年（1931） 昭和7年（1932） 昭和8年（1933） 昭和11年（1936） 昭和12年（1937） 昭和13年（1938） 昭和15年（1940） 昭和16年（1941） 昭和19年（1944） 昭和20年（1945） 昭和21年（1946） 昭和37年（1962） | 8月 陸軍士官学校入学（士官生徒11期） 7月 陸軍士官学校砲兵科を優等で卒業 11月 陸軍砲工学校卒業 日清戦争に従軍。旅順口、威海衛の戦闘に参加 12月 陸軍大学校入学（明治32年卒業） 12月 陸軍省軍事課勤務 10月 少佐。由良要塞砲兵連隊勤務 2月 ドイツに駐在（～37年4月） 6月 日露戦争に出征。旅順要塞攻略、奉天付近の戦闘に参加（～明治38年4月） 3月 軍事課勤務 2月 ふたたびドイツ駐在 12月 陸軍省砲兵課長 大佐 6月 陸軍省副官兼砲兵課長 8月 少将。支那駐屯軍司令官 7月 青島守備軍參謀長 3月 陸軍省軍務局長（～大正7年12月） 7月 中將 12月 參謀本部付、パリ講和会議派遣（～大正8年8月） 1月 23日 シーメンス事件表面化 8月 23日 ドイツに宣戦布告 1月 18日 対中21か条要求 11月 3日 裕仁親王立太子礼举行 11月 7日 ロシア10月革命 8月 2日 シベリア出兵を宣言 8月 3日 米騒動始まる 1月 18日 パリ講和会議 3月 1日 朝鮮万歳事件 5月 4日 5・4運動始まる 6月 10日 皇太子裕仁婚約 10月 国際連盟発足 12月 宮中某重大事件 11月 25日 皇太子裕仁摂政となる 7月 15日 日本共産党創立 9月 1日 関東大震災 1月 26日 政格仁結婚 3月 2日 普通選挙法案可決 3月 7日 治安維持法成立 12月 25日 大正天皇病没。昭和と改元 2月 7日 大正天皇大葬 3月 金融恐慌始まる 6月 4日 張作霖爆殺事件 11月 昭和天皇即位の御大典 7月 1日 张作霖爆殺事件の責任者処分。天皇、田中義一首相を叱責。 4月 22日 ロンドン軍縮条約調印 4月 25日 統帥権干犯問題起る 9月 18日 柳条湖事件 10月 17日 橋本欣五郎中佐らクーデター未遂事件（10月事件） 1月 28日 上海事件 3月 1日 满州国建国宣言 5月 15日 犬養首相暗殺される（5・15事件） 1月 1日 山海関事件 2月 17日 開譲、熱河省攻略を決定 3月 27日 国際連盟脱退 2月 26日 皇道派青年将校反乱（2・26事件） 7月 7日 虚満橋事件（日中全面戦争始まる） 9月 27日 日独伊3国同盟 12月 8日 米英に宣戦の詔書 7月 17日 東條内閣總辞職 8月 14日 御前会議、ボツダム宣言受諾を決定 1月 4日 GHQ公職追放指令 3月 病没。享年94歳 | |
| 本書第2巻 | 午後二時半退出。宮内省自駕車にて帰宅。午前10時入寝。午後十時起床。 | 午後二時半散歩。后新聞を読み、午后十時入寝。 | 午後五時半、新聞を読み、午後五時半退院。 |
| 本書第3巻 | 午前8時半出発。自動車出勤。光子は時差、鹿児への | 午前8時半出発。自駕車出勤。光子は時差、鹿児への | 午後五時半、新聞を読み、午後五時半退院。 |
| 解説 | 午前8時半出発。自駕車出勤。光子は時差、鹿児への | 午前8時半出発。自駕車出勤。光子は時差、鹿児への | 午後五時半、新聞を読み、午後五時半退院。 |

◆組見本（53%）

満洲事変前後の天皇の言動を伝える部分は、本日記のなかでも最も重要である。昭和6年9月18日夜の柳条湖事件の勃発後、事件について天皇の言葉が日記にあらわれるのは9月22日である。この日の午後、拝謁した奈良に、「行動を拡大せざる様総長に注意したるや」との御下問があった。天皇は、参謀本部を通じた関東軍の行動抑制を侍従武官長奈良に託し、実際、奈良は天皇の意を体して、金谷範三参謀総長や二宮治重参謀次長に適確な指示を与えている。

では遡中せず、新聞報道の如く行動し居たるを知り。

内大臣は必ずしも御心を察するに至らぬ。

午後五時半、新聞を読み、午後五時半退院。

午後五時半、新聞を読み、午後五